

布施鉄治（法政大学）

拠点工業開発地域における農村社会変動と農民

——農民こそ村落社会の変化に対する推進力と考える

一つの試論——

1.

本報告は、事例を北海道における道央新産都市指定開発地域の中で、戦略的に工業開発がすゝめられている苫小牧市域農村社会変動

と、それを支える農民に求める。ここでは、きわめてド拉斯チックな農村社会変動がみられる。戦後、少なくとも昭和三八年段階まで一貫して乳牛主産地形成をめざして、專業農家層が形成されてきたところの特徴を市域農村地域はもってきたが、それ以後、その動きが急速にくずれると共に、一方の極に機械化多頭数乳牛飼育農家層があらわれ、それまで地域農業自体が保有していた農業生産に対する価値志向とは、まったく異なる価値志向によって、地域農村社会自体が再編されつゝある。

一体如何なる起動力によつて、この変容がもたらされつゝあるのか。本報告は、かかる現象がもつとも端的にあらわれてゐると考えられる苫小牧市弁天開拓部落を事例にとりつゝ、「本年度の課題」を考える。

本報告における報告者の問題に対するアプローチの視角をあらかじめ示せば、次の如きものである。

第一に、報告者は「村落社会変動の起動力」として、その基点を社会的人間としての農民に求める。つまり個々の農民の社会的に生存するための実践過程を、村落社会変動の真の起動力と考える。ところで、さうでもなくこれら農民はまさに歴史的に現実に存在する農民であつて、その意味で彼らの現実的な全生活過程は、あきらかにそのもつとも基本的な中心軸（つまり物質的な諸関係レベルでの生存形態——その生存のための選択肢それ自身）をいわば全体制的、すなはち日本資本主義の経済発展法則に規定されてゐる。このことは資

本主義体制の中で、農民層が現に強いられてゐるところのたゆまぬ自立限界線の上昇とともに、所謂「農民層の分解形態」をみれば一目であきらかとなる。

ところで、こうした彼らはなによりもより直接的には彼らの生活をとりまく地域社会自体のもつ産業構造（諸生産組織の経済的社会的存在形態）によつて、そしてその変化によつて彼らの行動の枠組そのものが規定されるといふ関係におかれている。つまり、これは全体制レベルでの地域相互間の不均等発展は、資本主義に固有の法則とみなされねばならないものを含んでゐるから、当然のことながらその地域自体がその物質的生産の構造として、日本資本主義の全地域的発展の中で如何なる地位をしめてゐるか、ということによつて、その地域的なあらわしが異なるといふこと、それに現実的に存在する農民は規定されるといふことを物語つてゐる。しかもこの場合、今日の段階では少なくとも、都市—農村を含んだものとして、かかる「地域社会」は捉えられねばならぬ段階に入つてゐる。

したがつて、本報告では、かかる地域レベルの農民層のいわば行動の外枠を規定する経済的基底を知る意味で、第一に苫小牧地域農村における農民層の分解形態を捉えるが、そのさい、あわせて地域工業化の中での都市的諸機関の資本主義的分解のパターンも捉え、その中で農民層の分解のパターンを位置づけてみたいと考える。

るものとして立ちあらわれているが、けれどもかかる過程は、同時に、いわば与えられた経済構造を特定方向に権力を背景に誘導する。国レベル、あるいは市レベルでの諸政策の機能的結果としてもたらされるものであるし、また何よりも現実の農民層のさまざまな実践的諸過程の結果として、もたらされたものとして捉えられなければならぬものとして与えられていることを知る必要がある。したがって本報告では第二に、こうした地域における農民層分解パターンをもたらしたひとつのチェックポイントである地域レベルの農政の問題、その社会的機能の変化についてふねたい。

そして第三に、話を弁天開拓部落にうつし、個々の農民の生活レベル、行動のレベルに問題をおろすことにする。

この弁天開拓は、戦後第一期～三期にわたる入植者によって開拓された部落であるが、第一期・第二期・第三期とも、それぞれ現世帝王の世代は異なる。第一期入植者層はすでに入植二代目が実質的に經營の中心になろうとしているし、また第三期入植者は、いわば三〇～四〇代の壮年層が經營主としての地位についている。彼らはそれぞれ出身地も異なる。また異なった班を形成している。それに応じて入植地の土地条件も異なる。そして結論的にいうならば、第三期入植者層はいわば全面的な没落傾向をしめし、第二期入植者層が、この地域での酪農經營の機械化、多頭数飼育という形態の定着化に成功、第一期入植者層は、かつては酪農主産地形成の方向をすく志向しつゝも、再適応に成功せず、世代交替をとおして、第二期入植者層が現実にこの「部落」のものとしつゝある経営形態を

積極的にうけいれる中で、再適応の方向を志向しつゝあるといふのが部落の現状である。

そして、第一期層がいわばリーダー層となつて形成されつゝあつた部落社会の構造とはあきらかに異なつた構造が、第二期入植者層をリーダーとしつつこの部落の中には構成されつゝある。

しかしながら、それではこの第二期入植者層が、かかるあらたなる發展段階での酪農主産地形成のための再適応に成功したのは一体如何なる契機によるものなのだろうか。この社会過程を仔細に検討すると、それは単純に農基法農政にもとづく「農業近代化」の成果とはいえぬ社会過程が、そこに存在することにわれわれは気付かざるを得ない。

第一期入植者層、第二期入植者層、第三期入植者層とも、あらたなる生産形態を部落に定着化させるためにあらゆる努力を行なつていい。そこでは多くの創意が現実の問題として生かされている。しかしそれにもかゝわらず、第一期・第三期層ではなく、第二期入植者層があらたなる形での、リーダーシップをとぎり得たのは一体如何なる契機によるものなののか。彼らの実践過程の中で、一体どこがどう異なつていたのか。

そして、現実がこのような構造をもつものとして与えられるとき、零落する層は、地域レベルでの転換した農政によつて、いわば切り離され、他は育成されるという、かゝる現に生じている構造をさらに一層促進させる方向が、現実に政策として、推進せられている。

さて詳細は大会報告にゆずりたいと考えるが、こゝでは次の諸点を指摘しておこう。

(1) 現実の個々の農民の生活史および現時点での行動空間をみるとならば、この苦小牧の場合とりわけあきらかに「むら」を越えるひろがりをもつてゐるところ。つまり、いわば不可避的に、彼らは「むら」をこえる諸関係の中にセットされ、その中で農業生産という物質的生産過程を営んでいるという、その事実を反映して、所謂狭義の社会関係レベルにおいても、かゝる「むら」をこえる関係をもたざるを得ないものとして彼らの存在それ自体が与えられているという事実にわれわれは注目せざるを得ない。このことはいわば農村が都市に敵対的に従属させられながら、それ自身分解させられるという過程そのものは、当り前のことながら、村落社会がそのまますっぽりと都市を拠点とした資本主義的な諸関係によつて変容を強められるという形ではなしに、この過程は、同時に、個々の農民がバラされてこの関係の中にまきこまれる過程としてあらわれることを意味していく。したがつて、こうした「むら」をこえる社会関係のネットワークは個々の農民によつて異なるし、かゝる相互に異なつた社会的ネットワークをそれ自身たえず変容せしめながら、その過程をとおして、自らの生存基盤である「農業生産」組織を変容させ、そしてその中で彼ら自身変容し、その過程をとおして、彼らの形成する村落社会自体も変容するということになる。こうして彼ら自身があたらしい容器としての「村落社会」自体をつくりだすこと

(2) ところで、こゝで「むら」をこえる社会的ネットワークをとおして流れる情報内容にそくしていえば、これは(1)農業生産力の増強をもたらす技術的進歩にかゝわる知識技術、(2)さらにその技術的進歩の段階に相応して農業生産をひとつの「経営組織」として合理的に把握するという側面に因する知識技術、(3)また農業生産力のかゝる発展段階に即応した全体社会の資本主義的発展の中で「農業生産」「農業経営」したがつて、自己の生存そのもの、その地位の変化に関する知識技術にかゝわる側面、大きく段階的に区切るならば、農業生産にかゝわる情報の種類としてはこの三種類の内容がなるといえよう。

そして今日の段階の特徴は、かゝる三つのレベルが同時に相互に関連しつゝ変化し、またこの変化にともなつて、それらの情報をもたらす社会的媒体それ自身も変化しつゝ、これらの変化の総体が、個々の農民の「むら」をこえる社会関係の変化として与えられるるという点にある。

こうした諸社会関係の変化という事実は、その変化した情報内容をともなつて、現に彼らに与えられた「経営」をキバンとして、「物質的な農業生産過程」という実践を媒介として、つまりそのキャッチした情報をもとにして「自己の生存形態」そのものをより豊かな形に変ええたとき、これらの諸情報は、はじめて現実的な力となる。そしてその現実的な力となつたフォームそのものがひとつ「先進事例」として地域社会の中に伝播されることになる。そして、

こうした現実的変化を土台として「むら」のリーダーシップ構造そのものが変革されることになる。

③ ところで今日のわが国農村社会の一般的状況をみるとならば、この場合、先にわけた三つのレベルの情報内容のうち、とりわけ第一レベルの変化した内容が、不可避的に第二のレベルでの内容変化をともないつゝ急速に伝播している。そして、そこで伝播過程をみるとならば、それはもはや一部の地域的な雰農家の技術の伝播といふものではなく、公的な研究所・試験所等々で開発された技術そのものが、まさにその意味で全社会的な共有財産として開発された知識・技術が伝播され、それがさらに現実の各地域での農民層の実践過程をへて、広汎に相互交流、ひろく伝播するという形態をとっていること、あきらかである。この意味で、かゝる過程そのものは局地的な地域社会としての村落自体が、またそこで営なまれている農業生産様式自体がより普遍的なものへと再編されてゆく過程をしめしていくところである。

しかしながら問題は次の点にあると考える。すなわち、それはかかる社会的な共有財産としての知識技術が一様に全農民層のものとならず、かゝる知識技術を自己の経営内で展開できる条件をもつ層と然らざる層との別によって、現実は、その社会的に開拓せられた技術そのものが、あきらかに一部上層志向農家層の占有せるものとなつてゐるといふ事実である。しかも、農民層の自立限界線はたゞます上昇していくといふ現実は敵として存在する。

④ ところでそれなら一部上層志向農家層は一体如何なる契機に

よつて生まれえたのであるか。本報告での事例に即してごく大まかにいえば次のようないふる点が特徴的となる。すなわち、結論的にいへば、第二次入植者の成功は、当時部落社会がまさに共同に保有していく将来への飛躍の志向性につちかわれて、その若い成員④が「むら」をこえる範域へ個人的に飛躍を行ない、そこでの学習成果を「自己の經營」にもちかえることによりなしえたものである。つまりそれは、「むら」の中から自主的に生まれてきたものではなく、外部からいわば普遍的技術知識をもちかえることにより達成されたものである。かゝる点があきらかとなる。しかしこゝで注意しなければならないことは、第一に彼がそうした形で飛躍をこころみたその動機づけは、あきらかに部落社会の中でつちかわれたものであるし、その意味で当時の部落の全農民に共有せるものを統角的にしめしていくこと。第二にしかし、彼が一步飛躍した段階での再適応に成功すると、自己を育てあげた土壤、つまり部落農民との連帯をふり切つて、他の農民を差別、「わば・適者生存」の論理の中で将来を展望するにいたつてゐるといふこと。そこで第三に、この彼を起動力としたそのグループの「成功」は主観的にはともかく、客観的には、きわめて多く偶然的要因に負うてゐる面があるといふこと。こゝではその詳細は省略するが、第一に同じ開拓者として入植したとしても、入植地の土地条件は、その区画によつて異ならざるを得ないといふこと。また第二に入植時期の問題もある。第一次入植者によつて、ある程度社会的環境ーたとえば道路等々が整備されていたといふこと。第三に、④がその飛躍をなしえた教育機関での学習

も、その教育機関の選択そのものは、当時の部落のなかでつちかわされたカルチャーにしたがつていわばその延長としてそこに入つたといふこと。またこのこと、関連して、例えは第三次入植者の中にも、入植にさへして開拓実習所に入所、あらかじめ学習を行なつたものもある。これを④とすると、彼はあきらかに適応に成功していない。教科書にはなかつた現実が、彼の前には存在したからだ。こゝにはもちろん、そのそれぞれの教育機関での教育過程の問題が介在するが、しかし現状は（自然的な社会的な）彼④の行動に対する大きな壁としておへいかぶさつてゐる。彼には学習成果を生かして、創意を發揮するにもできえない、といふ現状がそこにはある。しかし前者④の場合、自己の経営の前におへいかぶさる障害は一応克服されつゝある。彼は、その中であらたなる経営の展開を可能にし、その中で創意を対象化することが可能となつてゐる。ところでこの段階で、地域農政は⑤を切り、④をひろいあげ、④に対してもさまざまなかつれを行なうにいたる。しかしよく考えてみると、④と⑤との機会が逆であつた場合、そして④と⑤の立場が逆であつた場合、地域農政は⑤を切り、④をひろいあげたであろう。体制的な選択は、④とう農民、⑤とう農民を対象としてなされてゐるわけではなじ。そこには全く別の原理が働いてゐる。さて以上述べたことを総合すると、個々の農民にとって、農業での再適応が可能であるか、どうかは、きわめて多く偶然的要因によつて支配されてゐることがあきらかとなる。その中で、農民は人間としては相互に分断され、農民自身が同じ農民をお互いに差別し、連帯感を失なつてゆく……。

(5) ところで、すでにみたように農業での自立限界線は、今日のわが国の現状ではたゞひきあげられてゆくであろう。こうした中で、農民層はあくまでも、自己の存在そのものを前述した意味での偶然性にゆだねるのであろうか。それを自己の意志による必然性に転化しうる契機は現実には存在しないのであろうか。本報告の事例に関する限り、かかる点は鋭角的にはあらわれてゐない。しかししながら報告者は、こゝであらためて先に述べた農業生産に関する知識・技術の第三レベルの問題が提起されざるを得ない、と若える。すなわち、前述の第三レベルでの諸知識は体制的には、いわばステロタイプとして第一→第二→第三と連結せる形で農業における近代化であるとして与えられてゐる。このことは農基法をみればあきらかである。しかしながら、現実に農業生産を続行する農民にとって、かよう上から与えられた第一→第二→第三という重積的論理が、彼らの現実に照らして、とくに第三レベルにおいては非連結であるといふこと、かゝる点は意識的にせよ、あるいは無意識的にせよ感ぜざるを得ない点にまで、現状は到達してゐると思われる。

(農業政策に対する農民の関心をみよ) つまり、今日までのところ少なくとも第一→第二のレベルまでは、いわば今日の社会において普遍的となつたところの諸知識をもととして、自然的対象をより合理的に克服し、さらに直接的生産過程そのものを組織的・合理的にコントロールするといふ態度をかなり一般化した。しかしかゝる努力にもかゝわらず、自立限界線の上昇とともに、具体的な生活は実感として忙しくなるだけだ、といふ現状が一方に存してゐる。

かかる場合、第一→第二→レベルではや自己のものとなりつゝある合理的思考によって、自分の生存のために「自らの經營」をとりまく諸条件を合理的思考によって変革しようとする発想は当然のことながら、もたらされざるを得ない、と考える。そして結果としては（客観的には）それは反独占的な志向として、立ちあらわれざるを得ないものとして与えられるであろう。そして、かかる点がより明確になり、意識的になるにつれ、農民と労働者の階級としての連帯はより強まりざるを得ないであろう。しかし重要なことは、かかる過程は同時に「個々」の適応、という論理ではないそれを克服した上での「層」としての言葉を替えるならば、階級としての「農民層」あるいはさらに「農民・労働者層」という連帯がよみがえる過程をしめしていくという事実であろう。報告者は、かかる段階に立ちいたつて、はじめて農民はそれ自身偶然的な存在ではなく、人間として必然性に生きる存在として蘇生するものと考える。そして、かかる過程は言葉をかえるならば、彼らが人間と人間との関係をおして、はじめて真正に普遍的な存在となる過程をしめすものと考える。

(6) さて、「さゝか論理がひとりあるきをした感があるが、以上の社会過程はいさゞもなく農民層だけの特殊な過程としてあらわるものではない。そしてまた日本の資本主義のものキャラシティの問題、またその危機との問題と関連（そしてそれは不可欠に全世界的な資本主義体制の問題と関連して論じられる性質をもつ）して論じられなければならない問題であろう。かかる点を抜きにすると、

報告者の立論は、全くの空論であるといふ誤解も生じてくるおそれがある。しかし、ここで報告者が強調したい点は前述のように、村落社会変動の起動力は少なくとも社会的に存在する「農民」の中に求められねばならぬということ。そして客観的に、彼らは漸次自らを世界史的存在として、言葉を替えるならば普遍的なものとして自らをあらわさざるを得ないものとして与えられているということ。そしてまた本大会での報告者の報告が、かかる文脈の上にたつ立論であるといふ点である。